

## 江戸前期の女性と漢籍

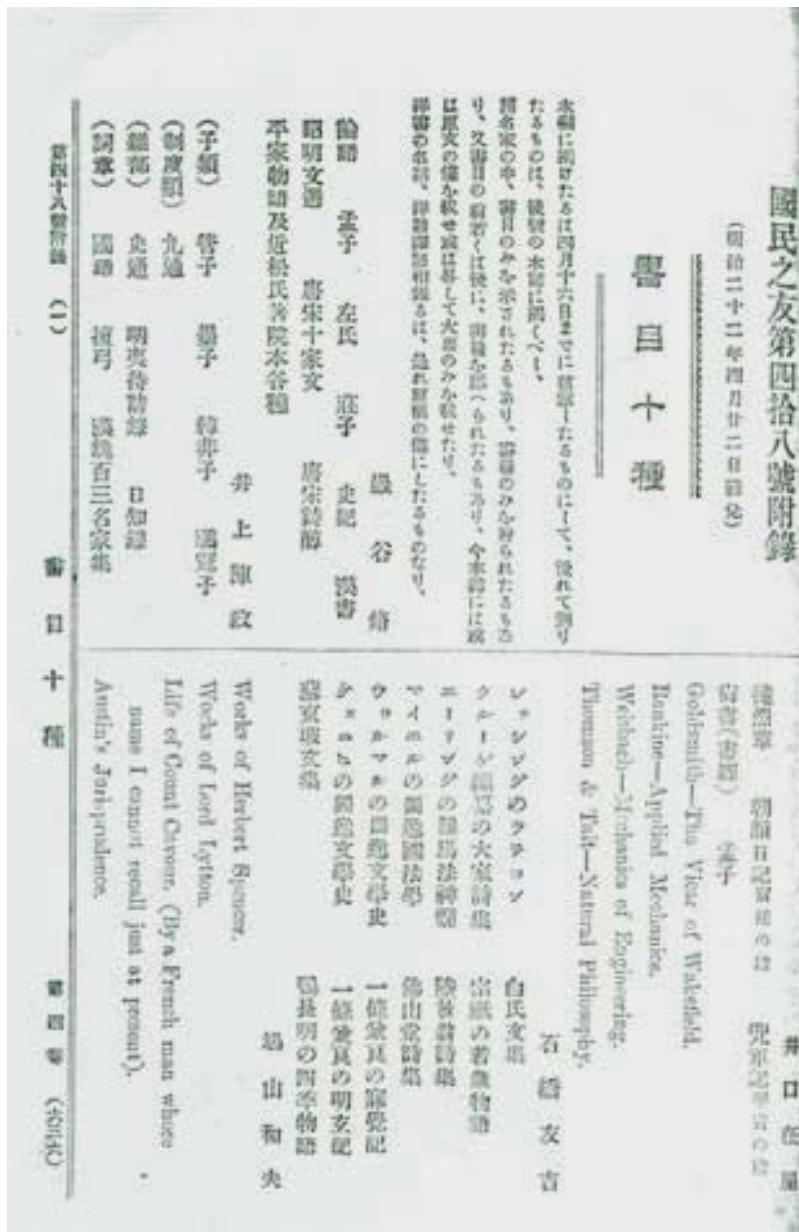
ピーター・コーニツキー

引用資料に関しては、読みやすくするため、一部仮名遣い・漢字などを改めた部分がある。

### 『幸徳秋水全集』第九巻「後のかたみ」17 - 18 頁

廿二日発兌『国民之友』に、「書目十種」と題せる附録を添へたり。こは民友記者が兼ねて投寄を乞ひ置ける各その嗜好の十種内外の書目に付き、方今有名の大家先生の答書を掲載したるものなり。いずれもその趣を異にしたれど、さしも目に天下の奇山水を保ち、智に万卷の書を蔵むる連中が、和漢洋より粹を抜き秀を探りしものと思へば、いと面白く覚へて幾度となく繰返し見たり。さるにても予は六歳になりけるとき始めて小学読本を繙きそめしより、書生の名の下に月日を重ねる茲に殆ど十三年、歳に一部と見積りても十三部以上はたしかに読み居る筈なり。されば今日まで予が読みたるは如何なる巻ぞ。考へ来れば、書生なる名の下を蒙り居れる実体を終に見出すこと能はず。今この雑誌に対しては赧然として、また茫乎として殆ど將に自失せるなり。無論乳臭の小児にてことさらに撰抜すべき書物のあるいわれなし。大家先生が嗜好の書目十種より思ひ付て筆を把れるは実にも嗚呼なる業ながら、自分が後の日の参考にもとて掲ぐるものは、『古文真宝』『東萊博議』『孟子』『荀子』『法華経』（こは無論一端を窺ふ可くもあらず、解せぬながら何故か常に机上に置き度くなれり）『遠羅天釜』『白詩選』『唐詩選』『金聖歎評三国志』『燕山外史』『情史抄』『古今集』『徒然草』『太平記』『平家物語』『盛衰記』『日蓮大士真實伝』『八犬伝』『弓張月』『頼豪怪鼠伝』『夢想兵衛』『娘節用』『梅曆』、春の屋著作『書生気質』『細君』他数種、『あいびき』『浮雲』『無味気』『蝴蝶』、近松著作全書、院本数種、謡曲数種及『膝栗毛』『浮世風呂』、この書目は予が覗きたる（予は読むといはず）書籍の内、非常に面白く思ひて（今もなほ面白く思へり）二三ヶ月ないし半年一年座右を放たず据へ置きて（この中今は所持せざるあれど）今後必ず一部を具へて読まんと思へるものなれば、後の日の参考として掲げしなり。見よこの書目中一巻の現時必要の文字あるか。予は実に他有用の書は一枚も読みし事なし。ただ学校の課書をその時々父兄への義務として一通り覗きしのみ。その他は種々の政治文学に関する新聞雑誌と、上に掲げし書類のみにて書生の名の下に十余年進み来れり。

関直彦等「書目十種」「国民之友」48号・49号(明治二十二年)



「増補書籍目録」(寛文十年 1670)、  
 「江戸時代書林出版書籍目録集成」第一卷所収

目録

天台宗、当宗、俱舍、律宗、華嚴、法相、真言、禪家、浄土、一向宗、仮名仏書、儒書、文集、詩、韻書、神書、曆書、軍書、医書、仮名和書、歌書、連歌書、俳諧書、女書、謡

本、算書、盤上書、茶湯書、躰方書、名所尽、名画尽、狂歌集、舞本、往来書、石榴、掛物

『図録日本出版文化史展' 96 京都』(平成八年)

慶長年間(1596~1615) 嵯峨本

明暦年間(1655~1658) 市場にあふれる書物

林羅山著『經典題説』、林鷲峰著『日本書籍考』、いずれも承応年間 1652 - 1655 刊

永田善斎『膾余雜録』(承応2 1653 刊) 卷一

国朝上自<sub>二</sub>縉笏大人<sub>一</sub>、下至<sub>二</sub>大夫士庶及富商栄農<sub>一</sub>、教<sub>二</sub>処女<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>伊勢源氏物語之類<sub>一</sub>。蓋欲<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>女詠和歌<sub>一</sub>也。女詠<sub>二</sub>和歌<sub>一</sub>果何益之有。唯欲<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>女嫺<sub>一</sub>彼之淫行<sub>一</sub>、則女性易<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>淫<sub>一</sub>、況於<sub>レ</sub>嫺乎。是招<sub>レ</sub>禍之媒、而不<sub>レ</sub>察之愚、甚<sub>二</sub>於授賊以<sub>レ</sub>刃<sub>一</sub>。漢語若不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>読、以<sub>二</sub>以呂波字<sub>一</sub>、訓<sub>二</sub>釈于孝経列女伝等<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>習而知<sub>レ</sub>之可也」

(国朝 上は<sup>しんこつ</sup>縉笏の大人より、下は大夫・士庶及び富商・栄農に至るまで、処女に教ふるに、『伊勢』『源氏物語』の類を以てす。けだし、女をして和歌を詠ましめんと欲するなり。女の和歌を詠む、果して何の益かこれ有らん。ただ女をして彼の淫行に<sup>なら</sup>嫺はしめんと欲すれば、すなはち女は性として淫に流れ易し、いはんや嫺ふにおいてをや。これ禍を招くの媒にして、察せざるの愚、賊に授くるに刃をもつてするより甚だし。漢語 もし読むことを得ざれば、以呂波の字をもつて『孝経』『列女伝』等を訓釈し、習ひてこれを知らしむれば可なり。)

中村<sup>てきさい</sup>惕斎(1629 - 1702)『比売鑑』卷一(寛文元年 1661 序、元禄15年 1702 までに完成、正徳二年 1712 刊)、『近世女子教育思想』第2巻、9頁

「女は七つより男に隔たり、八つより閨の戸を出でず。(中略)婦人の年老い、子なくて女徳を備え女礼に明なる者を招き入れて女子に教を受けしむるなり。(中略)文は『小

## 江戸前期の女性と漢籍

学』、『大学』、『論語』、『孝経』、『列女伝』、『<sup>じょかい</sup>女誠』など読み習わせ、九つ十の頃よりその道理をも聴ゆべし。」

\* 『訓蒙図彙』

貝原益軒(1630-1714) 『和俗童子訓』 『教女子法』 (『益軒全集』第3巻、217頁)

「七歳より<sup>かな</sup>和字をならはしめ、又おとこもじをも習はしむべし。(中略) 『孝経』の首章、『論語』の学而篇、<sup>さうだいこ</sup>曹大家が『女誠』などを読ましめ、孝順貞潔の道を教ゆるべし。」

藤井懶斎(1626-1706) 『閑際筆記』巻上(『日本隨筆大成』第1期、第9巻、171頁)

「本朝婦女ノ学アル者、伊勢、紫式部、清少納言、大貳ノ三位、赤染ノ右衛門ノ<sup>ともがら</sup>輩ニ如ハナシ。其文辞ヲ<sup>その</sup>観見ベシ。然ルニ皆ナ聖賢ノ学ヲ<sup>し</sup>識ル者ニ<sup>あらず</sup>非。只ダ是レ漢ノ<sup>さいえん</sup>蔡琰等ノ<sup>のみ</sup>亜流而已。安<sup>なんぞそのあやまちすくなき</sup>其<sup>えんや</sup>過<sup>しから</sup>寡<sup>よま</sup>コトヲ得哉。然バ女子ノ学、其誰ニカ<sup>それ</sup>適<sup>できじう</sup>従<sup>す</sup>。曰ク曹氏ガ『女誠』等ノ書、先づ之ヲ<sup>よま</sup>読ズンバ有ルベカラザルナリ。」

Roger Ascham, Thomas Salter, Suzanne W. Hull, *Chaste, silent and obedient: English books for women 1475-1640* (San Marino, CA: Huntington Library, 1982) 参照。

『古今書籍題林』(延宝三年 1675) 『江戸時代書林出版書籍目録集成』第一巻、200頁

女書 『女誠』 『めのとのさうし(乳母の草紙)』 『女訓抄』 『かがみ草』 『女四書』 『本朝女鑑』 『本朝列女伝』

1655年 北村季吟 『仮名列女伝』

1656年 『女四書』

13~14世紀のヨーロッパの女子修道院とラテン語      ヒルデガードとラテン語

『井上通女全集』修訂版(香川県立丸亀高等学校同窓会、1973)

附録「先妣井上孺人行状」

## 江戸前期の女性と漢籍

明年甲午（正徳四年、1714）の夏、先妣<sup>せんび</sup> 長子 宗衍のために長野氏の女を娶りて長婦と為す。家事は巨細悉く子婦二人に委任し、自らは閑暇に就きて詩を賦し、歌を嘍<sup>よ</sup>み、和漢の典籍を耽嗜して、その志を楽しましむ。

### 加賀の千代

田捨女<sup>てん</sup>

江馬細香<sup>さいこう</sup>（1789 - 1863）

野中えん（1660 - 1725）

### 『日本教育史資料』（文部省、1890 - 92）第5巻 野中婉<sup>えん</sup>の伝より

婉は良継（野中兼山）の第三女なり。安履亭と号す。母は池氏。万治三年、高知に生る。幼にして聡敏、好みて書を読む。寛文四年、五歳にして宿毛に遷り、禁錮せらるること四十年、学を勤め怠らず。後、谷重遠を師としてその説を尊信し、能く四書五経を講談す。謫居中、詩歌を詠じ、自ら遣る。また書を善くし、殊に楷書に工なり。当時、書籍に乏しきを以て四書の如きは手写して之を蔵む。元禄十六年秋、赦されて帰り、土佐郡朝倉村に居し、医を以て業とし、薬を売り、以て自ら給す。而してその術頗る妙に至る。仕官の者来りて治を乞ふときは相見るを肯んぜず。糸を患者の寸口に結び、障を隔て糸端を執り、以て脈を診し、治を施す。また効験あり。故に俚諺 技の精妙に至る者を称して「婉子の糸診」と曰ふと云ふ。